

大日本を内外に発揚した本願寺

— 初代シンガポール・カナダ開教使 佐々木千重の生涯を軸に —

酒生文弥

プロローグ - 北陸・天平の蔓 -

754（天平勝宝 6）年 唐僧・鑑真は 6 度目の挑戦で日本渡来、538 年公伝した仏教は大乗戒壇を得て聖武天皇の鎮護国家政策は 756 年東大寺大仏開眼法要をもって内外に宣揚されました。鑑真が薩摩坊ノ津に上陸した年の夏、越前足羽荘を営む生江臣東人は東大寺に荘園を寄進して国分寺を建立、私が生育した浄福寺の起源です。

1 世紀初頭イエスは釈迦の慈悲に感化されてユダヤ教を愛の宗教に改革、逆に仏教は拝一神教化して大乘仏教となり東アジアに伝播します。普遍的な霊性文化としてキリスト教は 4 世紀ローマ帝国国教となって欧州を統合、大乘仏教は 6 世紀東アジア国際社会を形成します。大仏開眼は日本の東アジア国際社会参加宣言でした。

古来白山を信仰した北陸に華嚴宗が説かれ、泰澄が真言を広め、蓮如が念仏共同体を結実します。貴族の教養から庶民の信仰へ、浄福寺も華嚴・真言・真宗と変遷しています。

近代、世界が欧米列強の覇道に蹂躪される中、大日本帝国が極東に独り立ち、アジア植民地解放と王道楽土をめざします。その気概には神道（浄・穢二元の多神教）を内包する大乘仏教が満ちていました。私の曾祖父で（西）本願寺シンガポール・バンクーバー初代開教使として活躍した高善寺住職・佐々木千重（1871~1944）の生涯に沿って、大日本の威風堂々たる海外進出を発揚した近代日本仏教を管見します。

本願寺 22 世大谷光端（1876~1948）と 佐々木千重（1871~1944）

近江佐々木氏は福井県越前市に真言宗・高善寺を創建しました。親鸞（1173~1262）の北陸巡教時に住職が直弟子となり今日に至る真宗の古刹です。過去帳に戦国時代 寺族より「小太夫が武門に就き果し合いで客死」とあり、映画『佐々木小次郎』製作時に作家安西篤子らがこれを小次郎と同定。今立町（当時）は門前に佐々木小次郎公園を造営しています。

「南無阿弥陀仏を唱うれば十方無量の諸仏は百十千重困憊して喜び護り賜う也（宇宙から如来する無量の光と命を念ずれば、覚者達は千重に護り助けてくださる）」（現世利益和讃）

大日本を内外に発揚した本願寺

名君松平春嶽のもと幕末の越前は橋本佐内・日下部太郎ら志士を輩出、維新後も小学生から英語を教えるなど極めて開明的でした。滋賀出身の父・信空は 1871(明治 4)年に生まれた長男を気宇壮大な千重と命名、世界に羽ばたく僧侶にと願いました。近江・越前は貧しく、廃仏毀釈もあって高善寺は逆境にありました。

新選組屯所であった(西)本願寺も極めて先進的で、21 世大谷光尊は文学寮(1639 年創立の学林が前身)を創って英才教育を実施、千重はここで英語・サンスクリット語を習得して頭角を現します。欧州に留学した島沈黙雷、英語で仏教を講じた赤松連城、『Kuwaitan』のラフディオ・ハーン(小泉八雲)、朝日新聞論説主幹・杉村楚人冠ら錚錚たる教授陣に学び、のちに高輪仏教学院を創設する酒生慧眼、東京帝大仏教学教授となる高楠順次郎、初代ハワイ開教総長となる今村恵猛など学友も綺羅星のごとく。ここで新門・光端と邂逅し認められたことが千重の生涯を光輝に満たします。

本願寺 22 世大谷光端(鏡如)は、歌人・九条武子を妹、政府要職を務めた大谷尊由を弟、大正天皇后の妹・壽子を妻とし、大谷探検隊・教団近代化(帝国議会モデルとなる宗会創設)・海外開教使(ウラジオ・シンガポール・中国・北米)・従軍布教使・英才教育(二楽荘・武庫中学)等々、大日本帝国の躍進を近代日本仏教から内外に発揚します。

東アジアを皇室を戴く日本大乘仏教で再統合する。光端の「開教」は、まず北(ウラジオ布教所)と南(シンガポール本願寺)に橋頭保を築き、中国(大谷派が先導)に展開、北米にも進出する、という戦略的なものでした。南進の拠点シンガポール本願寺初代開教使に任じられ、日露戦争勝利に貢献すると直ちにバンクーバーのカナダ仏教会初代開教使に転ぜられたのが千重でした。在留邦人・現地民に温情溢れる教化活動を行いながら、冷徹な諜報戦の最前線に立つ、が任務の両輪でした。

木曜島、シンガポール

18 世紀末「バウンティ号の反乱」で漂流するシブライ船長はオーストラリア南西に島々を発見し曜日で命名。1897(明治 30)年千重はそのひとつ木曜島に渡ります。卒業して酒生慧眼の妹トミエと結婚、印欧を旅行した夫婦の最初の任地でした。当時この島は高瀬貝(高級ボタン原料)・真珠貝で一攫千金を狙う日本人が群がり過酷な潜水で 700 名もの若者が命を落としていたのです。ここから 1899(明治 32)年 8 月英国東アジア経営の要衝で在留邦人もはるかに多いシンガポールに転進します。

マレー語でシンガーは「立ち寄る」プラウは「島」、シンガポールは「寄港する中継地」を意味します。東西南北海上交通のハブであり、文字通りイギリス東洋植民地経営の要衝でした。港々で繁盛するのは「最古の職業」、鎖国をものともせず江戸時代から南方に出稼ぎしていた

大日本を内外に発揚した本願寺

日本人は「からゆきさん」たちでした。驚くことに、彼女らはマダガスカル、インド、スマトラ、インドネシア、オーストラリアまで娼館を点在させ、当時 1800 人あまりのシンガポール邦人の大多数も若い娼婦でした。九州の天草・島原から長崎の女衞を経る南洋コネクションは、1869 年スエズ運河開通で隆盛する近代海運を人間的に彩ったのです。

牛馬と一緒に葬られた彼女らの遺骸を埋葬するために 1888 (明治 21) 年二木多賀次郎らは日本人墓地を開設。寄港した釋椽山和尚が最初の法要をし、1911(明治 44)年永平寺・日置黙仙老師が釋教山西有寺を建立、曹洞宗が日本人墓地を管理します。しかし埋葬者の大半は門徒で、供養の最大の担い手は本願寺でした。

着任とともに千重はヴィクトリア街に布教所を設立。翌年 1900 (明治 33) 年 1 月 28 日の開所式は「もとより人を貴賤貧富によって別つべき筈なく」領事・医師・商人・「妖嬌を競ふ女子」が差別なく参列し、外国からは「印度大菩薩会長ダルマパーラ・セイロン・中国・ミャンマー・その他各種の人種、一切平等に入り交じりて、一堂に会せしこと」在留邦人によるこれまで最大の式典でした。千重は定期説法会の他、在留邦人に英語・現地人に日本語を教えるなど精力的に活動し、妻トミエも特に娼婦たちに裁縫・作法・料理を教え、夫婦で地域の福祉に挺身します。

敵艦見ゆ

1904 (明治 37 年) 年 2 月「日露戦争」勃発。日本海軍がロシア旅順・ウラジオ艦隊を撃滅すると、10 月 15 日バルト海リバウ港から戦艦 8 隻を含む 38 隻の威容でバルチック艦隊が出撃。。翌年 1 月マダガスカル島でに第 3 艦隊との合流に投錨する間、ホテル経営者・赤崎伝三郎は艦船の種類・数・補給品 (石炭・水・食料) 等を諜報してインド・ボンベイ日本領事館に打電。からゆきさん達も褥での情報収集に加え、ロシア海兵に「逆情報」心理戦さえ仕掛け、貯金・着物・簪など戦費のたしにと領事館に供出さえしました。どこやらの「慰安婦」とは大違いで「娘子軍」の名に値する挺身、史実として顕彰さるべきです。

1905 (明治 38) 年 3 月末、千重はインドネシアなど先行寄港地から薪水・石炭補給等の詳細な兵站情報を収集して領事館に提出。4 月 8 日シンガポール沖を遊弋するバルチック艦隊の観察情報を海軍省に打電しています。高善寺に残る東郷平八郎提督・伊藤博文元首相らと談笑する千重の写真は、本願寺開教が軍と緊密な連携にあったことの証です。

バンクーバー

カナダ日系移民はバンクーバーで 1904（明治 37）年仏教会（Buddhist Church）設立準備委員会を発足させ本願寺に開教使派遣を要請。これを受けて佐々木千重はシンガポールから帰国し開教使初代カナダ開教使に任じられます。カナダ大陸鉄道はすでに完成していて、バンクーバーは大西洋を経て欧州から、シアトルを経てアメリカから最新情報が集まるハブでした。帝国海軍諜報員でもある千重がバンクーバーに 8 年も滞在する理由は明白です。

夫妻はシンガポールで授かった長男に夭逝され次男・千象と 3 人で 1905（明治 38）年 10 月 12 日バンクーバーに到着、盛大な歓迎を受けてアレキサンダー街に居住して 2 か月後に長女・文枝が生まれます。パウエル街の日本人街・メインストリートの中国人街に隣接するバンクーバー仏教会で、毎日曜日午後 2 時半からと 7 時から 2 回定例説教を行い「其の豊富なる思想と熱誠なる能弁を以て」約 650 名の信徒を大いに魅了したそうです。

1 世の多くは英語が話せず病気になっても医師に説明さえできませんでした。千重は「患者用英語短問篇」という小冊子を作成して与え、毎週欠かさず入院患者を慰問して通訳しました。娼婦に売春を辞めさせ見合い相手を紹介するなど、日系人社会の向上に献身しました。妻トミエもシンガポール時代同様、彼女らに裁縫・家事・西洋の風習しきたりを熱心に教えました。自分たちの暮らす開教使宿舎を独身者に開放して食べ物を提供する活動も行ったそうです。

赴任して 2 年目 1907 年「バンクーバー暴動」に直面。東洋系移民を脅威に感じる白人労働組合は 1905 年 5 月 14 日サンフランシスコで「アジア排斥同盟（AEL: Asiatic Exclusion League）」を結成、隣接するカナダにも伝播し、“To keep Oriental immigrants out of British Columbia（東洋移民を BC 州から排除すべし）”をスローガンに排斥運動が広がり、8 月 12 日暴徒と化した白人暴徒がチャイナタウン・ジャパントウンを荒らし回ります。中国移民は身をひそめましたが、日系移民は日本刀・棍棒・瓶などで武装して反撃、死傷者も出ました。千重は市当局にこの集団暴行事件を抗議し、事態は収拾して後日賠償も行われましたが、北米における「暴力による人種差別」を目のあたりにしたのです。

エスニック・グループがホスト社会と敵対状況になったとき対応は 2 つに分かれます。ひとつは「郷に入っては郷に従え」同化（assimilation）路線です。当時バンクーバーで鏑木五郎牧師率いる日系メソジスト教会が邦字新聞『加奈陀新報』で勧めていたキリスト教化がこれです。もうひとつは「どこにあっても、どこで働いても、日本人は大和魂をもった忠良なる臣民である。日本は日露戦争でロシアのような大国をも破った強い国である。差別を受けても日本人らしく行動しなければならない」という行き方です。教育勅語を捧じ日本語による教育を行う現地「国民学校」の要職にもあった千重はこの道を堅持し、仏教会誌を『大陸日報』に発展させて大日本の誇りと国威を発揚しました。

暴動の翌月 9 月、帝国海軍巡洋艦「宗谷」「阿蘇」練習艦隊がバンクーバーに寄港。旧名・ヴ

アリヤークとバヤーン、両艦は日露戦争戦利品です。上陸した士官候補生たちへの歓迎の辞で千重は「在外日本人が差別を受けているのは日本が世界に理解されていない」からで「日本の国威を発揚」することこそ無理解と差別を解決する手立てである「日本人が強い国粋思想を持ち、日本が強国にならなければ差別や蔑視はなくなる」と言明しています。当時日本人の真正の見解でした。

8年間日系人同胞と苦楽を共にし、3人の娘（文枝・千代子・雅子）に恵まれ、仏教会堂を設計して完成させました。興味深いエピソードに1912年（大正元）年4月15日の「タイタニック号沈没事件」に対して手厚い追悼法要をした史料があります。1913（大正2）年11月千重は任を離れ帰途、埠頭には大勢の人々が船影が見えなくなるまで手を振り続けたそうです。

明治・大正の光端

千重終生の恩師・大谷光端は1903（明治36）年、探検隊でインド・ビハール州に「靈鷲山（『浄土三部経』・『法華経』共通の舞台）」を発見直後に父・光尊が往生し、本願寺22世門主に就任します。その後も3次の西域探検隊を送り、日露戦争・シベリア出兵・大東亜戦争に際して多数の「従軍布教使」を派遣します。1908（明治38）年六甲山麓・岡本に「二楽荘」を建設して探検収集品を展示、英才教育の「武庫中学（祖父・奥田宣岱の母校）」・園芸試験場・測候所・印刷所などを周辺に設置するなど、大日本帝国の国威発揚に邁進します。

1913（大正2）年には孫文と会見し中華民国政府最高顧問に就任。もしこのご縁が日中史に結実していたなら東アジア史は大きく変わっていたことでしょう。この年の暮れカナダより帰国した千重は師弟の交わりを温めています。

使命感のまま奔放に実践する光端の壮大な事業は大谷家の財政を傾かせ、教団に疑獄事件が発生。翌1914（大正3）年引責辞任して大連に引退します。しかし1919（大正8）年仏教原典翻訳の「光壽会」設立、1921（大正10）年上海に日中人材育成学校「策進学院」創設など、旭日の帝国に住まう人々を皇国仏教で教化する意気はますます軒昂でした。

シベリア

通算14年を海外で活躍した千重は帰国後、島地黙雷の後援する「政教社」に参加します。三宅雪嶺、志賀重高昂ら開明的ナショナリズムと国粋保存を至上とする結社です。井上円了らと仏教界から同人となった千重は、海外開教で培った真の保守・日本精神の国際的発揚を内地文化人に啓発しました。

1917（大正6）年「ロシア革命」勃発、日本はシベリアに出兵します。1918（大正7）年48

歳の千重は「従軍布教使」として参加。赤軍・白軍の攻防に列強が干渉する中辛酸を舐める日本軍将兵を現地で鼓舞しながら、ソビエトという史上初の共産国家勃興に密着して諜報活動を行います。ソビエトロシアの確立を見届けて翌年離任し帰国しました。

カナダ再訪、アメリカ

カナダ仏教会はその後分裂の危機に瀕し、收拾のため千重は再びバンクーバーに赴きます。体調を崩した妻と3子を残して1923（大正12）年2月長女・文枝（17歳）を伴って渡航。元娼婦の仏教会員が幸せな家庭人になっていて、文枝の世話をしたそうです。信望と指導力で仏教会を2か月で和解・統合、千重はそのまま北米開教総長代理に任じられます。カナダ・アメリカに点在する数十の仏教会を統括する要職です。

53歳からサンフランシスコを拠点に2年間、日系移民2世たちを教育しながら北米日系人社会全体を指導して帰国、本願寺23世大谷尊由門主に報告しています。千重の助言に従い尊由は1926（昭和元）年11月からハワイ・合衆国本土・カナダを巡錫します。これが本願寺門主海外巡教の嚆矢となり、皇室の縁戚である門主の歴訪は日系人の誇りを奮い立たせました。北米日系人社会は今も現代日本に勝る誇りと矜持を保持していますが、千重らが教化した「神仏と皇室を尊崇する自立した日本人」という一世からの気概が、多民族社会アメリカでこそ純化醸成されているものと思料します。

小樽

帰国後1927（昭和2）年、千重は小樽別院輪番に任じられます。病床の妻を郷里に残し、今度は次女・千代子（当時22歳）を伴って赴任。次男・千象も開教使となり福井で結婚して北米に渡ります。

義兄・酒生慧眼は東京帝国大学を出て仏教教育に専念、本願寺が東京に創設した高輪佛教大学（龍谷大学の前身）学長に39歳で就任、大阪商業学校（大阪市立大学の前身）を創設しています。慧眼は小樽の雙葉女学校を高等女学院に昇格させ、千重はここで教鞭をとります。慧眼は結核で46歳で往生しますが、曾祖父の二人が内外に連携して近代日本独立不羈の精神を発揚したことは誇りです。

祖父・酒生章秀は千重の三女・雅子と結婚し北米開教使となり、1933年（昭和8年）長男・秀彦（5歳）と次男・文彦（私の父、3歳）を浄福寺に残してカリフォルニアに渡航。千象・章秀とも日米戦中を強制収容所に過ごしたあとアメリカ・カナダに帰化。佐々木・酒生一族の大半は今も北米に日本の威儀を北米に保っています。

帰郷、日米開戦と往生

7年の小樽勤務を終え1935（昭和10）年帰郷、待っていたかのようにトミエ61歳で往生。千重は晩年を地元青少年の育成に捧げます。インド・欧州・シンガポール・北米での見聞を地元の学校や役所で講演して回ります。感化された多くの若者の中に、戦後沖縄返還を実現させた故・若泉敬 京都産業大学教授がいます。越前竹人形で有名な福井ですが、日本人の体格向上のため独自の竹椅子を考案し普及につとめたというエピソードもあります。

帝国海軍諜報員でもあった千重、日米開戦の不可避は知っていました。前年胃ガンと診断され闘病しながら1941（昭和16）年12月8日を高善寺・成道会（釈迦が悟った日の法要）中に迎えます。甥である私の父・文彦（10歳）は兄・秀彦（12歳）とともに、カリフォルニア開教で両親と離れ高善寺に暮らしていました。端然と開戦の報を聞いた千重は「文坊、大きな声では言えないがこの戦争は日本が必ず負けるよ」と父に囁いたそうです。

奇襲による開戦で日米に残留する双方国民を交換する船が準備されます。やはり日本敗北を予見した祖父・章秀は二人ともアメリカに「疎開」させようとしませんが、浄福寺継承者を必要とする檀家は「おとなしく素行のよかった」次男・文彦を渡しませんでした。かくして千重は、戦う日米の間に長男夫婦・孫と引き裂かれ、私の父も両親・兄弟と生き別れました。病魔もあってか取り乱した千重は、不可能を知らながら雪を踏み分けて郵便局に通い、何度も手紙を送ろうとしたそうです。

1944（昭和19）年6月23日 佐々木千重は孫・文彦らに看取られて高善寺で往生を遂げます。享年74歳。連合艦隊がマリアナ沖で大敗し大本営がサイパン奪回を断念した日でした。

光端は、近衛内閣参議・小磯内閣顧問として大東亜戦争を指導しました。1945（昭和20）年大連で膀胱ガンに倒れ入院中にソ連に抑留、1947（昭和22）年祖帰還して公職追放となります。晩年を大分県別府に養生し、この地を国際観光都市にすることに没頭。翌1948（昭和23）年10月5日に往生を遂げますが、大日本を世界に発揚するという情熱の火は最期まで衰えませんでした。光端最後の尽力は1950（昭和25）年「別府国際観光温泉部文化都市設置法」に結実します。現在の「地方創成」「インバウンド」を60年も先駆ける業績でした。

エピローグ - ヤマトスピリット再興 -

「ヤマト」はアマタ（多様・多元）の転訛で、様々に異なる民族や文化が「大きく和する」ことが「大和」魂の原点です。太古より日本は、様々なモノのケ高さ（「モノノ・ケ」＝神々）を八百万神と仰ぎ、穢を厭い「浄」を希求（厭離穢土・欣求浄土）しながら多元対立を調和・洗練

させ統合してきました。仏教伝来でホトケ（Buddha の当初漢訳は「浮図（ほと）」だったので、ヒトケ高くなれることを「ホト・ケ」と表現）も拝まれ、神仏は習合してヤマトスピリットの源泉となります。

統合（integration）は、万差億別の個性ある個々人が、お互いを尊重しあって対等に纏まることを意味します。1億2千万余「それぞれ目的をもって生きる国民」を統合する象徴として天皇陛下・皇室を崇敬護持する。カントの説く「目的の王国」理想実現を合意する素晴らしい理念であると思います。

いま「新たなる帝国主義」の時代に臨む祖国日本。いかなる偉大な文明もその内実には必ず素晴らしいスピリットを漲らせてきました。光端と千重が飛ぶが如く駆け抜けた、明治維新より大東亜戦争終戦にいたる大日本帝国。その栄光を内外に発揚した「世界史を改正しうる神仏のエートス」。いまこそ学びなおして未来へと再興すべきであると信じます。